対面リーディング通信

2012年10月1日 発行　　第145号（隔月刊）

灯りをかかげて go 周年 100年に向かって

2012年 10月

対面リーディング・ボランティアの集い お知らせ

日時：１１月８日（木曜日）午後１時～４時
場所：日本ライトハウス・本館　４階　第１会議室
講師：西林 洋二（にしばやし・ようじ）

西林さんは1942年、大阪生まれ。松下冷機の生産技術部門で設備機器の設計を担当されていましたが、失明しライトハウスで日常生活訓練を受けられました。また、大阪市立盲学校に入学、鍼師・灸師・按摩マッサージ師の免許も取得されました。その後、松下冷機に復職されヘルスキーパーとして活躍。定年後は西林鍼灸指圧院を開業されています。

西林さんは長い間、情報文化センターで対面を受けておられ、現在は地元の公共図書館で対面リーディングを利用されています。利用者の立場に立った具体的なお話しをうかがえることを楽しみにしています。

交流会では、居眠りやおしゃべりなど、普段の対面に関する意見交換ができればと思っています。皆さまのご参加をお待ちしています。

参加予定の方は職員までお知らせ下さい。また、メールでの受付も行っています。

メールアドレスは　book@iccb.jp　です。

なお、ご連絡がなかったかたには、後日お電話での出欠確認をさせていただきます。

今月号の主な内容

対面リーディングボランティアの集いのお知らせ			1
対面リーディングと私	一期一会	犬塚　敬彦	2
対面リーディング難所物語	耳で読む読書の歓びと哀しみ	二村　晃	3
私のふるさと	「らんちゅう」って？	工藤　ゆう	4
寄り道・回り道	総本家 喜多品老舗／おけやす 福本商店	今村　竹志	6
情報発信	視覚障害者の囲碁について	長宅　政夫	7
おしゃべり			8
情報発信	ベーチェット病と私	遠田 日出子	9
〃	デイジーオンラインサービス	松本　一寛	１０

対面リーディングと私

一期一会

犬塚（いぬづか） 敬彦（たかひこ）

早いもので、対面リーディングを始めてからもう一年が過ぎようとしています。

昨年３月、長かったサラリーマン生活に終止符を打ち、余暇を有意義に過ごそうと思って４月に大阪府高齢者大学の「朗読を楽しむ科」に入りました。声を出すことは健康にいいと聞いたからです。

クラスの自己紹介で、音訳講習を受けてボランティア活動をしていると話した人がいました。耳慣れない言葉でした。恥ずかしい話ですが、私はそれまで対面リーディングはおろか音訳という言葉さえ知りませんでした。

丁度その頃、地元池田市の社会福祉協議会が発行している「いけだの社協」で「池田声の図書」が会員を募集しているという記事を見かけました。社協に連絡を取り、後日会長の大木さまから電話をいただきました。お話を伺うと音訳講習は隔年実施で昨年は開催されないということでそれきりになっていました。私は学校の勉強で朗読のスキルが向上し、今年実施される音訳講習を受講してからボランティア活動ができればいいと考えていました。

ところが昨年夏、学校の共通講義で「社協の現状と課題」（大阪府社会福祉協議会 林部長）と「あなたが動けば社会は変わる」（芦屋 NPO センター 海士事務局長）を続けて聴きました。特に視覚障害者活動に関わっておられる海士さんの話が私の肩を押しました。彼女は講義の終わりでこう言ったのです。あなた方は勉強が終わってから何かしようと思っていませんか、幾つまで生きられると思っているの、何かする気があるのなら今すぐに始めなさい、始めれば勉強の仕方も違ってきますと。

私は教えてもらった日本ライトハウス情報文化センターに恐る恐るボランティア活動を申し出ました。音訳素人の私を受け入れることに内部で議論があったようですが、私が特技？として過去の経験で科学技術用語や法律用語はほぼ抵抗なく読めると申告したのが気に入られたのか、私が諦めかけたころに返事をいただいて、ボランティア友の会に入会しました。

私は今年高齢者大学の実践研究部朗読研究科に進学しました。また地元社協の音訳ボランティア講座を受講し、当情報文化センターの中井先生に音訳の基礎を教えていただきました。昨年秋にはあらためて池田声の図書にも入会させていただきました。月ほぼ一回の対面リーディングは、出会う人も毎回変わるし相手の方から教えられることも多く、遣り甲斐があります。多くの人との出会いがあって、今の活動があると思っています。

71. 耳で読む読書の歓びと哀しみ（その８）

二村（ふたむら）　晃（あきら）

さて、前号に続き私の高知での講演ですが、音訳者や図書館関係者の熱心な質問も多く質疑応答の時間が足りないほど。まずまずだったかと思っていました。ところが、「声が割れて小さく、マイクにうまく載っていなかったし、とても聴きとりにくいのよ」と、座席の最後列で聴いていた女房の評価でした。マイクを手持ちで喋ったせいか、広い会場に、音響設備の音量が及ばなかったようです。

終了後、主催者の坂本館長から、「関係者が皆、前の方に座っていたので後列の音量調節までは気がつかなくて……」と、音響調整の不手際を詫びられましたが、新設された多目的ホールのために、音量の調節が難しかったようです。

それにしても、私のマイク操作も拙劣でした。反省しきりです。

講演を終えて交流会までの時間に、松田さん始め、朗読奉仕会の方々に市内を案内して頂きました。まずは、ＪＲ高知駅前に出来た龍馬記念館へ向かいます。

一昨年のＮＨＫの大河ドラマで使用した龍馬邸のセットが呼び物で、そのまま移設してあるそうです。だが、上り下りの段差があって私には危険とのことで、見物は諦めてロビーで休んでいると、「面白い聴きものよ！」と、女房が呼びに来たのです。

テレビドラマの龍馬の扮装をした若い男が、「言うたキニ」「やったキニ」の土佐弁で、武市半平太との交友を語ってくれ一緒にカメラに収まりました。土佐に記した私の足跡です。

その後、はりまや橋を訪ね、復元された欄干にしっかり触って、両の掌に高知の思い出もたっぷりと焼きつけました。

日本がっかり名所の一つだそうですが、欄干を触って満足する私には立派な名所です。

交流会では、最初に登場した土佐弁落語家の司亭孫笑楽（つかさていまごしょうらく）さんが、枕で「今日の講演を傍聴して、音訳ボランティアをやろうと決意した」と語り、会場の拍手を浴びました。

高知市の職員で、60歳前の年配。若い頃、ビッグコミックを愛読していたと言うので、大いに意気投合しました。私がまだ読めていた頃です。

「最初の音訳活動、ぜひ漫画でやって下さいよ。当時の『土佐の純平』でも、『のたり松太郎』でもいい。待ってますよ」と、３０年昔の人気主人公たちの名前を挙げ、握手して別れました。高知との御縁が太くなる、大きな収穫でした。

南国土佐の温かい人情に、身も心もすっぽりと包まれて一夜を楽しく過ごしました。

台風が接近しているということでしたが、翌朝目覚めると、雨の音。先触れの雨が早くも降り出したのです。牧野植物園の見学を諦め、昼前のジェット機で帰ることにしました。

プロペラ機に乗降するため、長い滑走路を腰痛の私と、膝が痛む女房の二人で大雨の中を歩くなんてことになったら一大事です。幸いジェット機は雨より速く伊丹空港に到着し、昼少し過ぎには我が家に帰り着くことができました。近いのですね。

生まれて初めての高知県、お世話になったかずかずの思い出を胸に、悲喜交々の講演の旅は終りました。80歳、さすがに疲れました。

〈つづく〉

私のふるさと

「らんちゅう」って？

音声解説担当　工藤（くどう） ゆう

今回は私が住んでいる奈良県大和郡山市についてご紹介します。

そうは言いましても、さて何を書こうかと考えていたのですが、なにせ私の方向感覚ときたら絶望的で、名所をご案内するにも心もとないので、大和郡山市に関係する人物を中心に、お話をしたいと思います。

実は私は大和郡山市の出身ではなく、６歳の時に大阪から奈良に引越してきました。道を歩いていると、子どもの私の目に一番に入ってきたのは、「らんちゅう」という謎の単語。ご存じの方はもうおわかりだと思いますが、大和郡山市は金魚の産地として有名で、市内には金魚池があちらこちらにあります。そう、「らんちゅう」とは金魚のことだったのです。

大和郡山市における金魚養殖の由来は、享保９年（1724年）に柳沢吉里（やなぎさわ・よしさと）が甲斐国甲府藩（かいのくにこうふはん）（山梨県）から郡山藩初代藩主になったときに始まると伝えられています。郡山に来る際に金魚職人を一緒に連れて来てくれたので、幕末には武士の副業として盛んに行われるようになったのでした。「柳沢（よしやず）」といえば徳川綱吉（つなよし）の側用人だった柳沢吉保を連想された方もいるかもしれませんが、柳沢吉里はその吉保の長男です。また、吉里は父親譲りの学問好きで、経済的にも文化的にも郡山を繁栄させたことから、名君と評されています。現在、吉里の子孫によって設立された、数万点以上にのぼる古文書類を収蔵した「柳沢文庫」という地方史誌専門の図書館も存在します。

話は変わりますが、今年2012年は「古事記」編纂1300年を迎えます。日本最古の歴史書「古事記」の編纂に携わった稗田阿礼（ひえだのあれ）は大和郡山市稗田町の出身。どんな人だったかというと、これが全然わかっていないらしいのですが、古事記の序文には次のように記されています。

「時に舎人（とねり）あり、姓は稗田、名は阿礼、年は二十八、人となり聡明にして、目に度（わた）れば口に誦（よ）み、耳に佛（ふ）るれば心に勒（しる）しき」

つまり「目に触れたものは即座に言葉にすることができ、耳に触れたものは心に留めて忘れることはない」人だったというのです。なんとまあ、素晴らしい記憶力。そして、阿礼によって語られた古代の事柄や物語は今も広く語り継がれています。

古代から人は、何かを遺したいと思い、書いて、読んで、伝えていくことを繰り返しているんですね。関係ないと思っていても、意外なところでつながっていたりして、歴史というのは本当に面白いなあと思わずにはいられません。

ちなみに、大和郡山市では毎年、彼らにちなんだ、「全国金魚すくい選手権大会」「大和郡山・金魚検定」「記憶力大会」が開催されています。ご興味のある方はぜひ参加してみてくださいね。

寄り道・回り道

レポーター：今村（いまむら） 竹志（たけし）

総本家 喜多品老舗（きたしなろうほ） ／ おけやす 福本商店

■福本商店の住所電話です
【所在地】　滋賀県高島市安曇川町南船木１５７
【TEL】　0740-34-0074　【URL】　―
【行き方】　JR 湖西線安曇川駅から東へ車で約 10 分（萬木釣具店（ゆるぎ）そば）
【営業時間】　9:00～19:00　【定休日】　日曜日

“鮒寿し”と聞いて皆様、何を思い浮かべるでしょう。ややもすると鼻にツンとくるあの独特の臭いと、子のいっぱい詰まった「日本のチーズ」とも形容される味わい・食感を思い出された方は幸いです。なかには「二度と食べたくない」「あんな臭い物、見るだけでも嫌」という方もいらっしゃることでしょう。

今回は【番外編】ということで情文界隈を離れ、我が故郷、琵琶湖西岸部の特産品について、少しばかり紹介したいと思います。

いきなりですが「鮒寿しはもう食べられません」。「えっ！？」と疑問を持たれることでしょう。ホームページを検索すれば、販売しているお店はたくさん表示され、最近では駅ナカでも販売されていると聞きます。ただ、違うのです。『総本家 喜多品老舗』の味とは。

『喜多品老舗』は１７代、創業400年を誇りました。お店には徳川家康からのお礼状まで飾られている老舗中の老舗だったのですが…。残念なことに今年の８月に廃業されてしまいました。廃業を知り、試しにネットで検索したお店から注文しましたが、味が全くの別物。“鮒寿し＝喜多品”だった私にとって「もう、鮒寿しは食べられない」。出来るまで３年漬けるというスローフードの典型であった日本の食文化の一つが、消え去ってしまったのかと寂しい気持ちでした。

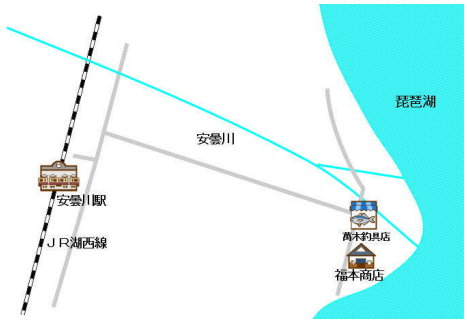
かつて地元には、蒲焼きの名人と呼ばれる方がおられました。その方の焼くうなぎの美味いこと美味いこと。厚みがあるにもかかわらず、中は柔らかく外はさくっと。この方が亡くなられ、後を継ぐ人も現われず味の失われてしまったことを重ねて思い出しました。

そんな折、滋賀にいる叔父が「ここはおいしいよ」ということで送ってくれたのが地元の屋号で「おけやす」と呼ばれる『福本商店』の鮒寿しでした。酒粕とみりんに漬けた発酵品の強い臭いの中に、少しの甘さ漂い、

ひとくち口にすると「おっ、これだ！」。ばらつかない程度に締まった子は、酸味をほどよく効かせつつも、しょっぱさを感じさせないまさに“鮒寿し”。他で食べられて「これは無理」と思われた方も、もう一度チャレンジしてみて下さい（地方への発送も行なっております）。

「汝、“おけやす”の鮒寿しを食べずして鮒寿しを語ることなかれ」

この瞬間にも失われつつある日本伝統の味を後世へ伝えていきたいものです。



鮒寿しの値段は時価。１匹あたり2,500円～3,000円くらい、切り身は1,500円見当

視覚障害者の囲碁について

ー 記憶力のアップと集中力を養い、強化します！！ ー

長宅（ながけ） 政夫（まさお）

囲碁とは、黒と白の碁石と碁盤を使って遊ぶ陣取りゲームです。中国で約4000年前に誕生したと言われています。

囲碁で遊ぶために必要な道具は、黒と白の碁石と碁盤だけです。正式な碁盤は、１９路盤（１９ろばん）と呼ばれていて、縦と横にそれぞれ線が１９本ずつ入っています。黒石181個・白石180個、碁笥（ごけ）というのに石が入っています。初心者用の１３路盤（ろばん）黒石85個・白石84個や９路盤（ろばん）黒石41個・白石40個というのもあります。

視覚障害者も「囲碁」「将棋」「オセロ」「トランプ」等、視覚障害者用に製作された道具（ゲーム）を使って楽しんでいます。

その中で、今回は「視覚障害者の囲碁」について述べたいと思います。

ここ10数年前から徐々にではあるがブームになっています。視覚障害者用の９路碁盤と碁石を使っています。視覚障害者囲碁普及会を中心にして全国大会も開催されています。

碁盤は９路盤で特別につくられた「枠」を設け、碁石は「オセロ」に似たチップを使い、白は両面がつるつるです。黒は片面をギザギザか、凹凸を設けています。それを「触知」しながら、頭の中で考えて、脳トレーニングしています。視覚障害者の場合は、一に実戦、二に実戦、ともかく毎日一度は、碁盤に向かい、石を触ることが大切です。

囲碁は２人で行い、一方が白、もう一方が黒を持って対戦します。黒と白が互いに陣地を広げあって、囲った陣地の大きい方が勝ちという、シンプルなゲームです。ただ陣地を広げるだけでなく、「石を取る」というルールのおかげで、より複雑でおもしろいゲームになっています。

囲碁は盤上の小宇宙、 囲碁はとてもシンプルなゲームですが、とても奥の深いゲームでもあります。その奥深さは無限の可能性を秘めているので、盤上の世界はしばしば宇宙のように例えられます。

脳トレーニングには最適、囲碁は頭脳スポーツと言われるほどよく脳をよく使います。そのため囲碁をすると、根気よく、記憶力がアップしたり、集中力を養う効果があると言われています。「脳トレするなら」囲碁をしましょう。

視覚障害者を対象としたボランティア活動は、「朗読」「点訳」「対面朗読」等々には国語力はもちろんのこと、総合的な教養が求められます。同時に、「根気強く」「集中力を高め」「記憶力のアップ」の必要なことと思います。「囲碁」はそれを養い、「先を読む」。高齢になってもそれを持続させています。

一度、「視覚障害者囲碁サークル」を見学に来ていただければ、いろいろと疑問が解消されると思います。これから「囲碁」をはじめようと思われる方は、教則本が書店に並んでいます。

問い合わせ：長宅　政夫（ながけ まさお）
携帯：090 - 8570 - 2493
携帯アドレス：hyper_3251@docomo.ne.jp

※日本ライトハウス情報文化センターで、
毎月　第３金曜日 13時から16時まで、
４階の会議室Ⅱで行っています。

アンケート結果　居眠り・おしゃべり

実施期間：2012 年 9 月 13 日（木）から 9 月 20 日（木）
アンケート回答数：８名

前回８月号で「居眠り」についての記事を掲載したところ、複数のボランティアさんから反響がありました。その中で「利用者さんのお声を聞いてほしい」というご意見がありましたので、急遽利用者さんへ「居眠りについて」や「おしゃべり（雑談）」についてアンケートを実施いたしました。期間を限定しておこなったため、その期間に利用したかただけのご意見、回答であることをご了承ください。

アンケートととは別に、ボランティアの皆さまから「おしゃべり」についての意見もいただいています。おしゃべりは人と人との潤滑油となる反面、対面しようと張り切って来たのに雑談で終わってしまったとの意見もありました。「おしゃべり」に対しても皆さまのご意見もお待ちしています。

【対面リーディングのなかで、ボランティアさんと本について、またはそれ以外について話をしますか？】

話をする　　８名
話をしない　０名

・依頼した新聞の記事などの内容で盛り上がることがある。雑談は嫌いではないのである。
・ボランティアさんと情報交換できるのが楽しい。
・時事ニュースなどについて話したりする。
・ボランティアさんから話してもらうのも楽しい。
・・別の利用者さんで雑談がお好きなかたがいらしたようで、自分は早く本を読んでほしいのに30分くらい雑談をされた。

今回アンケートに回答下さった中では、雑談やお持ちになった資料についてお話をすることを楽しんでおられるかたが多いようです。目の代わりとなって本を読むことは最優先ではありますが、おしゃべりを楽しみにしていらっしゃるかたも多いことがわかりましたので、対面サービスのなかで、対応を考えていく必要があるのだと思いました。

【対面中に眠くなったことはありますか？】

眠くなったことがある　６名
眠くなったことはない　２名

・昼の時間帯で食後などだとある。
・眠くなるのは生理現象なので・・・
・眠くなったことはあるが、自己責任
・睡眠不足でたまに・・・

今回のアンケートでは「不可抗力」も含み、居眠りをされたことがあるかたが多かったようです。対面スタジオの環境やご本人の体調にもよりますが、「そういうことは誰でもある」というご意見もありました。

ただ、ボランティアさんは「本を読む機械」ではありません。利用者さんにとってもボランティアさんにとっても貴重な時間を使っての対面サービスなので、できるだけ居眠りで終ってしまうようなことがないように、対話で補っていく必要があります。

相手のかたが居眠りをされていたら「休憩しましょうか」とか「（暑い、寒いから）空気の入れ換えをしましょうか」「お茶を飲みましょうか」など、話しかけてみてください。

お声掛けをすることで、お互いに意識することができるかと思います。

ほかにも対面リーディングで困ったことや疑問に思ったことなどあれば、ぜひお寄せください。

■経験談・ご意見は下記までお願いします。

・直接職員に
・「対面…活動記録簿」の意見欄に記入
・メールで book@iccb.jp まで

ベーチェット病と私

遠田 日出子

ベーチェット病とは

１９３７年（昭和１２年）に、トルコのイスタンブール大学皮膚科のベーチェット教授が新しい疾患として症例報告したことから、この名前で呼ばれている。

この病気はもともと地中海沿岸や中近東地域に多く見られ、シルクロードの地域に多く見られるので、別名シルクロード病とも呼ばれている。今年の７月に国際ベーチェット病の会合が開かれた。

我が国では１９２４年（大正１３年）に症例の報告があり、かなり以前からあったようだが、昭和３０年代中ごろから患者が激増し、今や世界一の多発国になっている。

ベーチェット病は、口腔粘膜のアフタ性潰瘍、外陰部潰瘍、皮膚症状、眼症状の４つの症状を主症状とする慢性再発性の全身性炎症性疾患である。主症状の他に関節炎、副睾丸炎、腸管病変、神経病変、血管病変などの副症状がある。

ベーチェット病は1972年当時の厚生省がもっとも早く難病に指定した疾患で、以来、研究班が組織され、病因、病態について探求されてきたが、未だに原因は不明である。

４つの主症状が全て現れた場合「完全型ベーチェット病」、主症状のうち３つまたは主症状２つ＋副症状のうち２つまたは眼病変を含む主症状２つと副症状２つを示したものを「不全型ベーチェット病」と言う。

私の発病

昭和５０年ごろ、運転免許を取りに行こうと職場の同僚と約束していました。でもなんだか目がおかしい。お月さんが傘をかぶったように見えます。３件目の医院で、大きな病院に行くように指示されました。難しい病気だと言われたが、その意味が分かりませんでした。図書館に行って百科事典を探してみると、主に失明する病気と１行書かれていました。病名を言っても誰に聞いても、知らないという返事です。

市民病院の待合室で、女性週刊誌を見ていたら、『死んでいく私に、婚約指輪をください」という、東京のベーチェット病の人の記事が載っていました。目だけではなくて死にゆく病気なのか！とショックを受けました。

また血管ベーチェットの患者さんの記事も載っていました。１万人に１人の病気と聞いて、同じ病気の人と話しをしたいが、どうして探せばいいのだろうかと悩んでいましたが、市民病院では、過去に３例だけと言われたので、専門病院にかかりたいと思いました。

実際はベーチェット病とは、転居や、結婚や、転勤などの環境の変化と、精神的、肉体的な疲れが重なった時に、自分の体にオーバーワークして「発作」という、炎症が起こる病です。人によって、口内炎が１～１０数か所出たり、腸潰瘍が一度にたくさんできて歩

けないとか、足に赤斑が出来て腫れたり、血管や神経に出るタイプの人もいます。食事が食べられないとか、目にも炎症が出て、網膜が傷んだり、視神経が悪くなったりと、後遺症が出ます。２～３週間で収まりますが、どれだけ、発作の回数を減らせるか、ということが大事です。原因は不明ですが対処療法として、いい薬が開発されてきています。診断基準も確立してきて、早期発見の患者さんも増えてきています。昔は３０年目にして、やっと、病名が分かって、ホッとしたという人もいました。

入院しているときに病気のことが分からず、これからどういうようになるのか不安ばかりでした。入院中に、あちこちに手紙を書きました。「失明しても働くことはできますか？どんな仕事がありますか？どんな事でもいいから教えて下さい」というような手紙です。しかし、どこからも返事は来ませんでした。

たまたま眼科の病棟が空いてなかったので、腎臓の透析の人の部屋に入院していました。隣のベットの人が、ベーチェット病大阪府支部が結成されたという新聞記事の切り抜きを持って来てくれました。会場となった会館に電話をして、会場を借りた人の名前を教えてもらいました。今なら、個人情報に引っかかるところでしょう。病気の事を知りたいという私の熱心な頼みに「とにかく、運営委員会に来てみたら？」ということになりました。

その時のことを週刊誌を手にして、青い顔をして、「ベーチェット病って死ぬ病気ですか」と言って慌てて入ってきた姿が印象的だったと言うことでした。親切に何時間もかけて話してくれて、懇談会で、同じ病状の人を探して聞いてみたらということになりまた。本当に、人によって、症状の出方も違うし、年齢によって急変したりと、なかなか同じ状況の人を見つけるのが難しいです。男性は重傷者が多いが女性は穏やかな人が多いと聞いて、ホッとしました。

機関誌や懇談会で、ほかの患者さんの話を聞き、安堵した事や、特定疾患の医療券の事、障害者年金の事を聞いて、気持ちが落ち着いたためか、目の発作が落ち着いてきました。

病気は治らなくても、病気とともに、病気と仲良く付き合って療養生活を楽しく過ごすことが大事だと思います。ベーチェット病なんかに負けへんで～と、より良い療養生活を過ごすために、よりどころとして、患者会があると思います。

それから恩返しにと、２０年間役員をしました。結婚もして、子供も出来、定年も迎え、目はこれほど落ちないだろうと思っていたのに、準盲（弱視と全盲の間で、全盲に準ずるという）になってしまいました。

結婚の事もあるので、目の病気は言わない方がいいとか、難病であることは隠したほうがいいとか言う人がいますが、何も悪いことはしていないので、隠していなかったがゆえに、色んなことを教えてもらって、今の私があると思います。ただ、宗教やインチキ療法など、困ることもあったけれども。

ベーチェット病はいまだに原因も分からないままです。昭和５５年に全国ベーチェット協会の、治療を受けながらリハビリできる施設を建てる運動が起きましたが、ベーチェット病にウイルス説が出たため、住民から建設反対されて、なかなか場所が決まらなかった事もありました。その後ウイルス説は消えましたが、間違った宣伝が患者をよけい苦しめることになりました。『雨の中の土下座の記録』という本も発行されましたが、今は探しても見つかりません。

施設に電話をすると、ベーチェット病の患者のために建設されたのですが、今は糖尿病の患者が多くなって、ベーチェット病患者はほんの少しだということです。

新しい患者さんもパソコンを見て患者会に来られています。患者会が真の意味で必要でなくなる事を願って、定年後に何かお手伝いができたらと思っています。

デイジーオンラインサービス

サービス部　松本（まつもと） 一寛（かずひろ）

デイジーオンラインサービスは、2011年視覚障害者情報総合ネットワーク「サピエ」で新たにスタートしたインターネットを利用したデイジー配信システムです。

これまでは、パソコンサイトや「らくらくホン」のアプリであるサピエモバイルデイジーを利用してデイジーデータをダウンロードして聴いたり、リクエストして自宅に届いたデイジー CD を再生機を使って聴いていました。

デイジーオンラインサービスは、オンラインサービスに対応した専用の端末を用いて、サピエで配信されているデイジーデータを再生・ダウンロードすることができます。

パソコンやケータイを使わなくてもサピエのデイジー図書を聴くことができる画期的なシステムです。

現在、デイジーオンラインサービスに対応した端末としては、シナノケンシが2011年９月末に発売したプレクストークリンクポケット PTP1/LINK（85,000円）があります。

サピエの個人会員10,400人のうち1,150人がデイジーオンラインサービスを利用しています。

サービス開始からわずか１０か月で全体の１１％を占めるまでになりました。

インターネット環境さえ整っていれば、パソコンを使わずにリンクポケットでサピエのデイジー図書を検索・再生・ダウンロードができるという手軽さが受けているようです。

サピエ図書館の「ネット閲覧室」には検索した図書や雑誌などのタイトルを登録できる機能があります。そこに登録しておくと時間に関係なく、いつでも聞く事ができます。

また、雑誌については定期配信の登録をしておけば、雑誌を定期的に自動で配信してくれたりもします。

例えば『文藝春秋』を登録すれば、毎月できあがるごとに自動的に配信されます。利用者にとっては取り寄せたりする手間もなく、取り忘れの心配もなく聞く事ができます。

このようにパソコンがなくても自分で図書を探して読書を楽しむことができるデイジーオンラインサービスのスタートは、視覚障害者の読書環境を便利にするものとして注目を集めています。

▼照りつける日差しは相変わらずだけど、空はいよいよ蒼く、昨日に比べてずいぶん高くなったように思えます。空気も心なしか澄み渡って来ました。　K

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6441-0015（代表）
06-6441-0039（サービス部）